

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

葱植えてよりの月日のみずみずし

刈谷 志津 選

東谷 晴男

(評) 葱は日本中いたる所で栽培されている。関東では根深葱、関西では葉葱を食用としている。昔、葱は「ひともし」と言われていた。小さい頃、母が葱を「ひともし」と呼んでいた事を思い出し懐かしさが甦る。葱には特有の香氣があり、薬味としては欠かすことができない。作者は葱を植えた。葱は活着が良く、買ってきた葱の根を土に下ろすだけですぐ根付く。そうして植えてみると、それからの日々の暮らしが光沢があり、生気に満ち新鮮(みずみずしい)月日となったと言ふ。独創的で感性の溢れた巧みな表現力に深い感銘を覚える。

返り花までのひとび水たまり

島村かりん

(評) 桜・桃・梨・山吹・つつじ等の花が、11月頃の小春日和に時ならぬ花を咲かせることがある。これを返り花と言ふ。二度咲き、忘れ花、狂い花とも言ふ。「人の世に花を絶やさず返り花」これは俳詩「狩」主宰の鷹羽狩行先生の有名な俳句。作者は通りすがりに、季節外れに咲いているほんの一二輪と思われる返り花を見つけた。俳眼は、それを見逃さなかった。もつと近づいて見たいが、そこにはそれを遮る水たまりがある。少し躊躇(ちゅうちゆ)したが一気に飛び越え、返り花に会うことが出来た。花を愛する者の優しさと、一途さがしみじみ伝わる。

陽に風にゆらゆら揺れて吊し柿

石原 静

(評) 吊るし柿は渋柿の皮を剥ぎ、軒下などに吊るして白い粉が噴くまで干す。干し上がったものは新年の縁起物として、飾りに用いたりもする。今年は柿の生り年で、私も百個余りを軒下に吊るしている。冬の日差しと寒い風に揺れながら、日一日と飴色を深めていく様子を見守っている。燦々と冬日が差し込む午後、吊るし柿の軒縁に腰を下ろして見上げていると、まるで柿簾の中にいる思いと、早く白い粉がつかないかなあと楽しみな日々でもある。作者も同じ思いでこの句を

作ったのでは。たくさん吊るし柿が風に揺れる光景は捨て難い田園情趣でもある。「ゆらゆら揺れて」では、少しずつ、ゆつくりと干されてゆく吊るし柿をユーモラスに的確に詠み表している。

入選

一人居の陽のあるうちの柚湯かな

津田 久美

(評) 老いの入浴は昼間の柚湯で寛ぎの一時。「陽のあるうち」の措辞がよい。

一年の諸事の終りや除夜の鐘

大川 節弥

(評) 色々あったこの一年、除夜の鐘と共に静かに行く。感慨無量。

台上がり龍馬目線の冬岬

岡村 嘉夫

(評) 高台にすくつと立つ幕末の志士坂本龍馬の銅像。眼下に広がる冬波の太平洋を見舞(みはる)かしている。

外景を絶ちて初冬の結露かな

竹崎たかひろ

(評) 寒い朝、窓ガラスを白く覆う結露。いよいよ冬の到来である。

銀杏落葉敷きつめられて黄の絨毯

渡邊ゆかり

(評) 銀杏落葉が隙間なく敷かれ、まるで黄色の絨毯。明るさが広がる。

一句抄

頬杖を解けば勤労感謝の日

東谷 晴男

山査(さんさ)の実に触れなんと男下駄

島村かりん

秒針が年の終りを告げにけり

大川 節弥

雪虫の風のない日の着地点

竹崎たかひろ

猪子(いのこ)行くこはわらわの道なるぞ

渡邊ゆかり

橋たもと行きつ戻りつ木の実降る

川村 博子

遠山の姿隠して初しぐれ

森岡 照月

ただ一人一部屋のみの冬灯

刈谷 志津

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

☎893-1922

有料広告

(医)慶誠会 高岡内科

院長 高岡和子

いの町新町86 TEL 088-892-0296

禁煙治療も行っています

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	☆	☆	○	○
午後 2:00~6:00	○	○	○	△	○	△

日曜、祝日、木曜と土曜の午後休診

診察医師 ○高岡誠人、高岡和子
☆高岡和子